



フィクション劇場 第二十七話
「彼氏」(20枚シナリオ)

大太
大

【はじめに】

○「フィクション劇場」作者の大太 大（お
おた・だい）と申します。つたない作品
にご興味を持って頂き、ありがとうございます
います。

【フィクション劇場とは】

○作者が世の中で違和感を感じている出来事
や疑問に思っていることなどに対して、
「もし、こういう設定や条件になった
ら、当事者たちはどう動くのか」を考え
たオムニバスドラマです。ドラマ部門に
第一話〜第二十五話をまとめて公開して
いまして、それと同様に著作権完全フリ
ーです。詳細はそちらをご覧ください。良
ければ各話もご覧いただければ嬉しいで
す。内容はマスメディアに少々風が向い
ている「性根の曲がった社会派ドラマ」
で、この第二十七話は20枚シナリオに
なります。では本編をどうぞ。

フィクション劇場 第二十七話「彼氏」

【登場人物】

来戸 哲也（きど・てつや）（55）…フリー

ジャーナリスト。元SBS（首都圏テレ

ビ）報道局デスク

来戸 友里恵（きど・ゆりえ）（52）…哲也

の妻

来戸 えり（きど・えり）（17）…哲也の

娘。高校2年生

（SBS報道番組「報道Prism」（プリズ

ム））

村上 健二（むらかみ・けんじ）（50）…ア

ンカー

山下 梨香（やました・りか）（29）…アシ

スタント

吉川 浩史（よしかわ・ひろし）（48）…プ

ロデューサー

日野 正夫（ひの・まさお）（29）…アシス

タントディレクター

フィクション劇場 第二十七話「彼氏」

オマル（１９）：えりの彼氏。難民申請中。

中東系出身。両腕にタトゥー

（えりの学校の友人）

山川 素子（やまかわ・もとこ）（１７）：え

りのクラスメイト

市岡 靖子（いちおか・やすこ）（１７）：同

右

浦上 恵（うらがみ・めぐみ）（１７）：同右

【あらすじ】

元SBS（首都圏テレビ）報道局デスクで、フリージャーナリストの来戸哲也（きど・てつや）は古巣SBSの報道番組「報道Prism（プリズム）」で解説をしている。

来戸は外国人対策がテーマの回に、難民の呼称や、過去にトラブルがあったが、収束した例を出して、好意的な形で解説する。

一方、哲也の娘で、高校2年生のえりは、オンラインゲームで知り合ったハンドルネーム「サーバン」に好意を抱き、妻の友里恵を通じて、哲也に顔合わせしたいと頼む。

妻の説得で会うことになった哲也だが、えりの彼氏は近隣に住むオマルという難民申請中の青年だった。哲也は転居を選択する。

その最中、番組のAD日野正夫は本番後に哲也を呼び止め、番組で報道していることに矛盾を感じていると話す。

哲也は当たり前前のことを疑う日野を評価し、自分は台本通りやっているだけだと話す。

フィクション劇場 第二十七話「彼氏」

O S B S 「報道 P r i s m」生放送スタジオ
(タ方)

中央に大型ディスプレイ。

向かって左にアンカーの村上健二、右
にアシスタントの山下梨香、村上の左
にフリージャーナリストの来戸哲也。

吉川「じゃあ、日野くん、カウントお願い！」

日野正夫「分かりました、吉川さん」

日野「はい。それではスタートします！ 5

秒前、3、2、1」

♪ジングル

出演者3人が座って礼をする。

村上・山下「こんばんは」

村上がカメラ視線で、

村上「S B S・首都圏テレビ『報道 P r i s
m』の時間です」

村上「今日は、日本の外国人政策の課題と今
後の展開について、掘り下げて行きたいと
思います」

山下「解説は、元SBS報道局デスクでフリージャーナリストの来戸哲也さんです」

山下は来戸の方を向いて、

山下「来戸さんよろしくお願い致します」

T…『フリージャーナリスト 来戸哲也』

来戸は礼をしながら、

来戸「よろしくお願い致します」

村上「まず、現状の外国人政策についてVTRにまとめていますので、ご覧下さい」

× × ×

村上は来戸の方を向いて、

村上「さて、来戸さん。VTRをご覧になって如何お考えでしょうか？」

以下、来戸は台本をめくったり、視線を台本に向けたりを多めにしながら、

来戸「はい。まず、世界的な動向の話を見せて頂きたいのですが、アメリカ・ヨーロッパを始めとした各国でナショナリズムの機運が高まっていることが挙げられます」

村上「それは、右派の力が強まっている、と

いうことですか？」

来戸「それは一概には言えません。確かに欧州の一部の議会では右派が議席を伸ばしているのですが、以前のような左右の分かれ方とは少し違うと感じています」

村上「具体的には？」

来戸「シンプルに言えば、今の閉塞した社会への不満という形で、その矛先が在留資格の無い外国人を始めとするみなさんに向けられているのではないかと考えています」

山下「いわゆる『不法移民』に対してですか？」

来戸「それは表現があまり良くありませんね。在留資格がないというのは、法律、具体的に言えば入管法に違反していることは確かなのですが、ルールに違反しているのであって、不法、つまり犯罪を犯している訳ではない、という解釈がなされています。国際的には『非正規』や自国民として登録されていない『無登録』という表現を

用いることが要請されています。日本では、その入管法に基づいた難民申請をしている方が、ほぼそれに当たるかと思えます」

村上「なるほど。失礼しました」

来戸「いえ。アメリカでも前政権はそうしていましたが、現政権では『不法移民』に戻っていますから、そのあたりは分かりにくくなっていますので、仕方のないところだと思います。あるTV番組で司会者の方、『不法移民の犯罪率は低い。データはある』と言ったことについて揶揄されていました。これも呼び方の問題でそういう誤解を招いていたのだと思います」

村上「分かりました。しかし、その無登録の方とのトラブルの話や一部逮捕されたという話もありますが？」

来戸「はい、それは事実です。逮捕に至った事案は弁解の余地はないと思いますが、トラブルについては文化の違いが大きいので

はないかと思えます。これは今に始まったことではありません」

村上「と、言いますと、過去にもあったのですか？」

来戸「はい。１９８０年代から９０年代にかけて、大手自動車メーカーの関連企業が南米からの出稼ぎ労働者を雇い入れたことがあったのですが、その方々が同じ団地に住んだことで、以前から住んでいた日本人住民との間でトラブルが起きたことがあります。かなり大きかったと聞いています。ただ、今では両者の交流が進んでいるそうです。ですので、外国人のみなさんとのトラブルは、ある意味、その過渡期にあるのではないかと考えています」

村上「文化の違いですか？」

来戸「そうですね」

来戸「最近、日本人選手が活躍している事で、アメリカ大リーグの試合をご覧になっている方もいらっしゃるかと思いますが、

タトゥーを入れている選手が目につきますよね？ これは誰かを威圧しようとして入れている訳ではないでしょうから、そういう違いでしょうか」

村上「一種の自己表現やファッションだという話を聞いたことがありますね」

来戸「はい。日本人では顔に手を当てて、少し上から目線をするくらいが精一杯だと思います」

山下「しかし、来戸さん。文化の違いであっても、最低限守るところは必要かと思えますが……」

来戸「おっしゃる通りです。両者の文化は尊重されなければならないと思いますが、私自身としては『郷に行っては郷に従え』の考え方で、生活に関わる公共のルールはこちらに合わせて欲しいと思っています」

村上「来戸さん、他に課題はありますでしょうか？」

来戸「宗教ですね。カルト的な宗教を信仰す

る無登録の方は少ないと思いますし、そういうみなさんを取材することは、もうないと思います。これは文化と違って、すり合わせが出来ないので、棲み分けという形が必要かと思います。タブーなどは特に」

村上「それでは、今後はどういう形でこれら課題に向き合って行けばいいのでしょうか？」

来戸「N G Oなども声明を出していますが、法整備などが急務だと思います。排他的な考えではなく、インクルージョン（包括性）の視点に立つ必要があると考えています」

村上「ありがとうございました」

× × ×

村上「それでは、今日はこの辺で失礼します」

三人は一礼する。

日野「はい、終了です。お疲れさまでした！」

村上、山本がセットから降りてくる。

来戸は閉じた台本を見ている。

来戸「…」

吉川は、それを見て、

吉川「来戸さん、どうされましたか？」

来戸「いえ、何でもありません」

来戸は台本を持ってセットから降りてくる。

吉川が出演した3人に向かって、

吉川「お疲れさまでした。では、今から反省会と来週の打ち合わせをしますので会議室にお願いします」

来戸「吉川さん、どのくらいかかりそうですか？」

吉川「いつも通り1時間くらいです」

来戸「分かりました」

来戸はスマホを取り出し、妻の友里恵に電話をする。

来戸「もしもし、友里恵か？　今、終わってた。2時間くらいでそっちに着くから。あ

あ、9時くらい。じゃあ」

○来戸の自宅（夜）

来戸は夕食を取るためにテーブルに座る。

続いて、妻の友里恵が座る。

娘のえりの座るところには、食べた食器が置いてある。

来戸「えりはどうした？」

友里恵「食事はもう済ませました。部屋に居ますよ」

来戸「一緒に食べないのか？」

友里恵「なんでもオンラインゲームをするんだって言って」

来戸「またそれか……。最近、こういうのでおびき出されるような事件も起きてるからな……」

友里恵「えりに限ってそういうことはないですよ」

来戸「まあ、その辺は大丈夫だろうが……。し

かし、毎日毎日じゃなんだろう？ 週2日はやらない、とか出来ないのか？」

友里恵「学校の友達と一緒にやっていて、毎日ゲームをしないと向こうが心配するみたいですよ」

来戸「ったく……。課金は友里恵がちゃんとチェックしておいてくれよ」

友里恵「分かっていますよ」

二人は食事を進める。

友里恵「ところで、この辺でも外国の方が増えてたでしょう？」

来戸「ああ。隣町に多く住んでるが、増えるみたいだから、こっちにも来てるんだろうな。それがどうかしたのか？」

友里恵「近所で話してたんだけど、少し先のアパートに住んでる方から苦情が出てるらしくって。夜、騒がしいって」

来戸「まあ、その辺は日本人と違いがあるから仕方ない」

友里恵「でも、自治会長さんが話をしに行っ

たけど言うことを聞いてくれないって。日本語は分かるみたいだけど……」

来戸「時間が経てば、聞いてくれるようになるよ」

来戸は食事続ける。

友里恵「……」

○同 えりの部屋（夜）

えりがスマホでオンラインゲームをしている。

ここでは「ホワイトアウト・サバイバル」を想定（実はあまり知りません

（笑）

えりのハンドルネームは「エリーナ」。

ハンドルネーム「サーバン」（オマル）とクラスメイト数名で同盟を組んでいる。

サーバンからえりに個人チャット。

（以下、チャット）

サーバン（以下、オマル）「こんばんは」

ユリーナ（以下、えり）「こんばんは」

オマル「今日もがんばろう！」

えり「うん！」

笑顔でプレイするえり。

○登校（朝）

えりが、クラスメイトの市岡靖子と浦上恵と3人で話ながら登校している。

同 山川素子がゆりの後ろから、

素子「えり、おはよ！」

ゆりは首を後に向けて、素子を見ながら、

えり「あっ、モトちゃん、おはよ」

山川が3人を見ながら、

素子「何の話してたの？」

靖子「もち、同盟の話だよ」

素子「大分増えたもんね、メンバー」

恵「まあ、がちり領地守って広げて行くこ！」

素子「そうだね。ねえ、えり」

えり「…う、うん」

靖子「えり、どうかしたの？」

えり「…なんでもない」

恵「遅くまでやってるから疲れてるんじゃない無

いの？ ほどほどにしときなよ」

えり「うん…、そうする」

4人は学校に向かって歩く。

○来戸の自宅（夕方）

友里恵が台所で、食事の準備をしている。

えりが後ろから、

えり「お母さん、ちょっと話があるんだけど

…」

友里恵「どうしたの？ えり」

○同（夜）

来戸と友里恵がテーブルで食事をして
いる。

来戸は箸を持ったまま驚いて、

来戸「紹介!？」

友里恵「ええ」

来戸「えりはまだ高2だぞ？」

友里恵「そういう大げさなものじゃなくて、
とりあえず挨拶したいってことみたいで

：

来戸「向こうがか？」

友里恵「いえ、二人で相談したみたいで：

来戸「：

来戸は少し落ち着く。

来戸「まあ：、悪いことじゃないが：

も、何でそんな話になったんだ？」

友里恵「詳しいことは教えてくれなかったけ

ど：、あなたTVに出てるでしょ？ それ

で強面みたいに感じたらしくって：

来戸「あれはTV用だってことは、えりも知

ってるはずだぞ？ 向こうにそれを言わな

かったのか？」

友里恵「その辺は私も：

来戸は席を立て、

来戸「えりに直接聞く！」

友里恵は来戸を手で制して、

友里恵「待って」

来戸は振り返って、友里恵を見る。

友里恵「…えりも年頃だから、ここは黙って

OKしたら？ ちゃぶ台を用意する訳じゃないでしょう？」

来戸はため息をつく。

来戸は椅子にドカッと座る。

来戸「…で、いつだ？」

友里恵「今週の日曜日が良いつて」

○日曜日（昼）

来戸とえりは居間で座っている。

えり「…ゴメンね、お父さん」

来戸「…まったく大げさな。そんなに私が怖いのか？」

えり「そうじゃないんだけど…、ちょっと…ね」

インターホンが鳴る。

えりがインターホンに向かって、

えり「はい。行きます」

えりが小走りに玄関に向かう。

来戸が後ろからゆっくり向かう。

えりが玄関のドアを開ける。

外には、両腕タトゥーの中東系のオマ
ルが立っている。

来戸は目を見開く。

オマルはうつむきながら、

オマル「ハジメ：マシテ。オマル、ト、イイ
マス」

オマルが軽くお辞儀をする。

来戸「：」

えりが来戸の方を向いて、

えり「オマルくんとはゲームで知り合ったん
だ：。偶然、この辺に住んで：。難民の
人なんだって」

来戸はオマルを凝視する。

オマルは来戸を少しうつむいたまま見

ている。

えり「お父さん…、いい…よね？」

来戸「…」

○登校（数日後…朝）

えりが一人でとぼとぼと登校している。

素子が後から近づきながら、

素子「えり、おはよう！」

えりは沈んだ声で、

えり「おはよう…」

素子「えり、あんた最近元気ないね。ここん
とこゲームに入っていないけど、なんかあつ
たの？」

えり「同盟…、抜けようかと思ってて
…」

素子「抜けるの!？」

えり「…うん」

素子「みんなで楽しくやってたのに？」

えり「そう…」

素子「よく分かんないね」

えり「モトちゃん。あと、もうひとつ、言わなきゃいけないことがあるんだけど…」

素子「何？」

OSBS「報道Prism」生放送スタジオ

(夕方)

村上「それでは、今日はこの辺で失礼します」

三人は一礼する。

日野「はい、終了です。お疲れさまでした！」

来戸、村上、山本がセットから降りてくる。

来戸は台本を持っている。

吉川は3人に向かって、

吉川「お疲れさまでした。では、今から反省会と次回の打ち合わせをしますので会議室をお願いします」

来戸は吉川に向かって、手を伸ばし

て、

来戸「吉川さん」

吉川は来戸の方に振り向く。

吉川「来戸さん、どうかしましたか？」

来戸「申し訳ないのですが、来週から反省会
を中座してもいいですか？」

吉川「まあ、最近は大きなトラブルはないの
で構いませんが……。どうかしたのです
か？」

来戸「いや、引越しをする予定で、帰宅する
のに今までより30分ほど余計に時間がか
ることになりそうでした」

吉川「来戸さんは家族想いですからね。分か
りました。他の方には私から話をしておき
ます」

来戸「ありがとうございます。それで今日は
その準備がありました。これで失礼させて
頂きたいのですが」

吉川「はい。そういうことでしたらOKです
よ」

来戸「では、失礼します」

来戸は吉川に一礼する。

吉川「お疲れさまでした」

来戸は台本を持ったまま、スタジオを後にしようとするが、日野に呼び止められる。

日野「来戸さん、少しいいですか？」

来戸「はい。長くならなければ」

日野「今日の放送ですけど、ちょっと自分のにしっくりこないところがあって……」

来戸「どの辺ですか？」

日野「この前の例の知事選で、落選した候補に対して『外国人の参政権を認めるつもりだ』っていうデマがあったじゃないですか」

来戸「ああ、ありましたね。この番組でも取り上げてましたから覚えています」

日野「この時の話って、参政権を与えることに対してネガティブなイメージだったと思うのですが……」

来戸「まあ、いろんな考え方の人がいらっしやいますから、私としては何とも言えないですね。デマということもありますし」

日野「それはそうなのですが……。でも、今日の放送って『長く日本にいる外国人が、なぜ政治に参加できないのか？』っていう内容があったような感じなのですが……」

来戸「そうとも取れるかも知れませんか」

日野「でしたら、何か矛盾していませんか？」

来戸は少し考える。

来戸「番組の内容については、私には何とも言えません。片方はあくまでデマでしたから」

来戸「……でも、日野さんの姿勢はいいと思いますよ。自分たちの放送していることが当たり前のことなのかって疑うということは。この話は吉川さんに聞いてみては如何ですか？ きちんとしたお返事を頂けると思いますよ」

フィクション劇場 第二十七話「彼氏」

来戸「私は：」

来戸は手に持っている台本を顔の横に
上げて、

来戸「台本通りにしゃべっているだけです
から」

E N D

（2025年7月16日）